

私と本との関わり ～いろんな世界を知るきっかけに～

日時 令和6年12月13日(金) 14時～15時40分

場所 くまもと県民交流館パレア 10階 会議室7

講師紹介

奥田 直美 さん

水俣市白浜町にある作家・石牟礼道子さんの書斎だった旧家で、『カライモブックス』という本屋を営んでおられます。

どう生きていけばよいのか悩んでいた18歳の時に、石牟礼さんのエッセイに感銘を受け、石牟礼文学を感じる精神的なよりどころの場を作りたいという思いから、2009年に夫の順平さんと地元・京都で古本屋をオープン。

準備中には、水俣に関する寄付本がダンボール箱いっぱい詰められて送られてくるなど、「たくさんの協力を得られた」と感謝の念を抱かれました。ご夫婦で何度か水俣を訪れ、石牟礼さんとの対面も果たし、2023年11月、水俣市に古本屋をオープンされました。



作家・石牟礼道子さんの紹介

石牟礼道子さん(1927～2018年)は、天草郡河浦町出身で水俣育ちの作家。代表作に『苦海浄土』があり、水俣病患者の魂の訴えをまとめられました。他に、『椿の海の記』、『あやとりの記』、『魂の秘境から』等の著書があります。

石牟礼さんの著書には、石牟礼さんが接した水俣の情景や史跡が随所に登場しています。講義の資料から著書の一部を紹介します。

○大廻(うまわ)りの塘

そして、あの「大廻(うまわ)りの塘(とも)」の方へむいて歩いてゆく。

点々と続く家のたたずまいが漁村めいてくる。田の間につづいて来ていた堰川も広くなって、潮の香がまじりあい、川底の草ももう海の草になる。干潟の真砂(まさご)の上に長々とひこばえて、ナゴヤ草や青海苔が、真水の筋のぐるりにもう生え初め、晩秋の磯のしんとした色どりがひろがっている。そこは亀ノ首という砂浜を持った岬で、砂浜をつつきつてしまえば、両側を深い芒(すすき)にかこわれた「大廻りの塘」に入るのである。

(「椿の海の記」河出文庫、P156より抜粋)

○水俣大橋より

八幡大橋付近から遠浅に潮が引けば、水俣川川口からひろがる干潟(ひがた)の貝は口をあけて死滅し、貝の腐肉の臭気と排水口の異臭とのいりまざった臭いが、海岸一面に漂っていた。(中略)

八幡排水口付近にこの前々年夏にかけられた「大橋」の上は、この頃、新しい橋と、「奇病魚」を見学にくる人びとで賑わった。

(「新装版 苦海浄土-わが水俣病」講談社文庫、P96より抜粋)

取材後の感想(講義の内容とは異なります)

私が現職だった時の新任地は水俣でした。駅を降りると直ぐ前には、新日窒水俣工場(当時)があります。

水俣は湯の児海岸をはじめ、風光明媚な美しい町です。当時も水俣といえば、水俣病が有名になっていて、何か複雑な気持ちになったことを覚えています。水俣は新日窒水俣工場以外に生産工場は少なく、水俣の産業を支えていたと言っても過言ではないでしょう。しかし、水銀という産業廃棄物を海に放出して、水俣病という公害病を発生させてしまいました。それによって、多くの人が犠牲になり、胎児性水俣病を生み出してしまう。人間が犯した罪は償わなければなりません。

また、このことを訴え続けた石牟礼道子さんの存在は大きかったと思います。